

2022年1月9日 降誕節第3主日礼拝

メッセージ「どちらの側から目を注ぎますか」

牛田匡牧師

聖書 マルコによる福音書 1章14-20節

コロナ禍の中で迎えた 2 回目の年末年始には、故郷でお正月を過ごすためなど、大勢の人たちが移動していたこともあり、先週には全国で感染者が 500 人ほどだったのが、今では 8000 人を超えるということで、この一週間であっという間に爆発的に急増しました。日本でも昨年の夏の感染拡大の「第 5 波」に続く、「第 6 波」ということが言われています。しかし、世界の情勢を見ていると、そのこと自体は驚くことではなく、オミクロン株が世界中を席卷していく中で、いずれ日本にも感染が広がってくることは、時間の問題として分かっていたことでした。にも拘わらず、各自治体の発表も、マスメディアの報道も、あまり注意喚起をしてこなかったように感じています。その結果が、年末年始の大勢の人の移動であり、今の結果につながっているのではないかと思います。「あまり不安を煽ると、社会経済が停滞してしまうからいけない」という意見もありますが、今の政府の動きは、事実から目を逸らして、自分に都合の悪いことは見ないふりをしているようにさえ感じます。そして、人々に伝える「伝え方」も、オブラートに包み込むあまり、事の重大さが見えにくくなってしまっています。それこそ福島第一原子力発電所の事故の際の「ただちに健康への影響はありません」という言葉のようです。事態は何も改善していないのに拘わらず、それが数年たつと、いつの間にか「アンダーコントロール（制御されている）」にすり替わり、多くの人々の間では話題にも上らなくなり、今では忘れられてしまっているかのようです。

昨年末から世界中に広まっている現在の「オミクロン株」は、「夏の『デルタ株』よりも 3 倍から 4 倍の感染力があるけれども、重症化率は半分ほどだ」ということが、盛んに報じられています。それだけを聞くと、「じゃあ大丈夫」と思ってしまいそうですが、実はそういうことはありません。強毒性の「デルタ株」は、以前の「アルファ株」に比べて 2.5 倍の重症化率でしたので、「オミクロン株」は重症化しにくいのではなく、「重症化率はデルタ株に比べると低いけれども、以前のアルファ株と同じくらいで、感染力がとても高い」というのが、正しい表現だと言えます。そもそも日本語では「軽症／中等症／重症」と 3 段階で分類されていて、それぞれ「入院は不要／入院が必要／集中治療室での処置が必要」と考えられています

が、WHO（世界保健機構）が使用している英語での分類では、それぞれ「ノン・シビア（深刻ではない）／シビア（深刻）／クリティカル（瀕死・重篤である）」の 3 段階です。日本語の「重症」という言葉から連想するものと、英語の「クリティカル」から連想する症状は、果たして同じでしょうか。これが翻訳の難しさであり、マジックです。

さてそんな翻訳のマジックは、私たちが読んでいる聖書にもたくさん登場します。聖書は、今から何千年も昔の古代のヘブライ語やギリシャ語で書かれています。それが現代ではそれぞれの言語に翻訳されています。日本語でもいくつもの翻訳がありますが、それらの翻訳を見比べてみると、そこには不必要なオブラートがあったり、「このように読んでもらいたい」「このように読まれると困る／面倒だ」というような翻訳者の意図があったりします。今回の聖書の言葉、「マルコによる福音書」1 章の 15 節の言葉「時は満ち、神の国は近づいた。悔い改めて、福音を信じなさい」は、「マルコによる福音書」では、イエス様のセリフとしては最初の言葉になっています。約 2000 年前にパレスチナの地を実際に生き、歩まれたイエス様の様々な記憶、思い出が、人々の中にはあったことと思いますが、そのイエス様の生涯、言葉と振る舞いを物語として書き記そうとした時に、イエス様の最初のセリフ、第一声として、この言葉が選ばれたというのは、やはり何か象徴的な意味があるのかもしれませんが。

「時は満ち、神の国は近づいた」というのは、日本語ではあまり上手に表現できませんが、現在完了形ですので、「まだ遠いけど、もうすぐ来るから、ボチボチ準備しようね」というのではなく、「もう既に、目と鼻の先にまで来てしまっている」というニュアンスです。言い換えれば、「もう来てしまった。今だよ今」ということでしょう。問題は、続く「悔い改めて、福音を信じなさい」です。「悔い改める」という日本語から連想するのは、「やってしまったことを反省して、深く後悔して、心を改める」ということではないかと思いますが、もともとのギリシャ語「メタノイア」の意味は、「視点を移す」です（メタ：変える＋ヌース：判断の筋道）。人は自分がどこに立っているかによって、見えるものが異なります。背が高い大人の人と、小さい子どもとでは、見えているものが異なりますし、まだハイハイしているような赤ちゃんとでは、生活している世界がまるで別なのではないのでしょうか。

「視点を移す」という時に、どこに視点を移すのか、どこに立って、どこから世界を眺めるのか、と言うと、それはイエス様が生き、歩まれた所です。聖書に記されている命の神の目は、いつも誰に向けられ、注がれていたか。それは、抑圧され、小さく

低くされている人たち、今も痛みの中にいる人たちでした。その人々の痛みを共感できる場所に、共に立つ、自分の立ち位置、視座を移すということ、それが本来の「メタノイア」「視点を移す」ということであり、釜ヶ崎の本田哲郎神父はそれを社会の底辺である「低みに立って見直す」と翻訳されています。「悔い改める」という言葉と「低みに立って見直す」という言葉とでは、全然違う言葉のように感じるのではないのでしょうか。

何かをしてかしてしまったり、失敗してしまったりした時に、「ごめんなさい。もう二度と繰り返さないように気をつけます」と口で言うことは簡単ですが、実際に繰り返さないことは子どもだけに限らず大人でも、なかなか難しいものです。むしろ大人が子どもを叱る時には「自分が同じことをされたら、どう思うの。自分が相手だったら、どんな気持ちができるのか、考えてみなさい」と言ったりするわけですが、そうやって口で言われても、実際に自分が相手の立場に立ってみななければ、なかなか分からないのが現実です。「悔い改める」と言って、自分と神様の問題、自分の心の中だけの問題にしてしまっておくことは簡単かもしれませんが、一方で「低みに立って見直し」、神様がおられる場所、神様が働いておられる人々の隣に、自分も立たせてもらって、そこから改めて世界を見つめ直そうとする時、見えてくる世界は全く異なって来るのではないかと思います。

16 節以降は「4 人の漁師を弟子にする」というお話が続きます。ガリラヤ湖のほとりを歩いていた時に、イエス様が声をかけられました。「彼らは漁師だった」とありますが、「湖で網を打っているのをご覧になった」わけですから、わざわざ漁師と書かなくても分かりそうなものです。ですが、ここで「漁師」と書かれているのは、それが当時の古代イスラエル社会では、宗教的にも穢^{けが}れていて、社会的にも差別されていた職業であったということを表わしているのでしょう。イエス様はシモンとその兄弟アンデレが湖で網を打っているのをご覧になって、声をかけたということですから、二人が岸に戻って来るのを待っていて声をかけられたのでしょう。

その後、イエス様はさらにゼベダイの子ヤコブとその兄弟ヨハネにも声をかけられました。イエス様から声をかけられた彼らは 4 人とも、網も舟も、そして父親すらもその場に置いて、イエス様について行ったとあります。網も舟も彼らの持ち物であったのかどうかは分かりません。舟主から借りていた舟や網だったかもしれません。ゼベダイの子ヤコブとヨハネとその父ゼベダイには「雇人たち」もいたということですか、仮に舟主であったとしても、漁師たちはガリラヤ湖での漁業権を「仲買人」とも呼ばれた徴税人たちからリースされていたために、そのリース料が漁獲高

の 4 割にも上っていた記録もあるそうです。ですから、漁師たちは陸の上の「小作農」たちと同様に、貧困と被差別に喘ぐ^{あえ}人たちでした。

イエス様はそんな 4 人の漁師たち、社会の中で弱く小さくされている人たちを敢えて選んで声をかけられたわけです。「私について来なさい。(魚ではなく)人間をとる漁師にしよう」。そして彼らはすぐに網を捨て、舟と父親を残して、イエス様についていきました。18節と 20節では「網を捨てて」「父と雇人たちを舟に残して」という別の言葉に翻訳されていますが、元の言葉は同じで「そのままにしておく」という意味です。ですから家族や網や舟という商売道具と「決別した」「捨て去った」ということではなく、むしろ「イエス様に付いていくという、今一番大切なものにごそ目を向ける」ということなのではないかと思えます。実際、シモンと呼ばれているペトロは家族と絶縁したわけではなく、イエス様と一緒に再びカファルナウムの「ペトロの家」を訪ねていたことも、福音書の中にはきちんと記されています(マタイ 8 章)。

イエス様に付いて行った 4 人の漁師たちは、この時から悩まなくなり、迷わなくなったわけではありませんでした。「今日の取れ高は大丈夫だろうか」「借金は後どれだけ働いたら返すことができるだろうか」などと考えて止まず、常に気が重く、不安が無くならなかった、そんな漁師たちにイエス様はそのままで「私について来なさい」と言われました。「自分の働きは十分だろうか」「きちんと評価してもらえるだろうか」私たちはいつも気に病んでいます。この 4 人の弟子たちもこの後、イエス様と行動を共にしながらも悩まなくなったわけでもなく、迷わなくなったわけでもなく、迷い、疑い、イエス様を裏切ることさえありました。それでもイエス様は彼らを赦されました。そのようにして彼らはやがて、イエス様と同じ視点、命の神と同じ所へ目を注ぐ者へと変えられていきました。

私たちはどこにいて、誰と一緒にいて、どちらの側から目を注いでいるでしょうか。また命の神の目はどこの誰に注がれているでしょうか。この新型コロナの「第 6 波」の中、具体的な行動として私たちに出来ることは多くないかもしれませんが。それでもイエス様は「私に付いて来なさい」「(私と一緒に)低みに立って世界を見直しなさい」と言われます。オブラートに包んで「見て見ぬふり」をしてしまうことなく、たとえ力は小さくても、神様はありのままの自分、そのままの私たちを豊かに用いてくださいます。神様がいつも共にいて働いて下さることに信頼して、私たちは低みに立って見直す歩みへと導かれていきます。